追悼曲 （伊藤光湖作曲）の解説

「それじゃあ伊藤さん、またお互い元気で会いましょうや！」これが電話を通して聞いた「ある方」の最期の言葉でした。そのほんの数か月後に、その方はご病気の悪化により亡くなられてしまいました。

その約１年ほど前のある日、札幌の実家に一本の電話がかかってきました。当時私はフランスにおりましたので、父が電話を受けました。あるコンサート・プロデューサーの方からで、父から「ある方が演奏依頼の件で伊藤光湖と話しがしたいため電話をかけるように番号を残されたので、すぐにかけるように」という連絡が来ました。

その番号に電話してみると「岸上春生様」という北海道・滝川市にお住まいの方で、ご自身は「ノースフェスタ管弦楽団」というオーケストラの演奏会を企画・実行しており、次の演奏会のソリストを依頼したい、とのお話しでした。

それまでの演奏会は、岸上様ご自身がピアノ教師もしておられたことから、生徒さんとオーケストラとの共演をという趣旨だったそうですが、当時ご自身がご高齢・ご病気であるということで、恐らくご自分にとって最後の演奏会になるであろうそのコンサートは滝川にゆかりのあるプロの演奏家にソリストをお願いしたい、とのご意向でした。

岸上様はクラシック音楽に並々ならぬ情熱をお持ちで、電話でお話ししているうちにすっかり意気投合し、「いやー伊藤さんと話してたら、元気になってきた！！」と興奮しながらおっしゃって、大変な大喜びで２時間に亘る熱弁を終えられました。

その熱意には人を動かす力がありました。無名な伊藤光湖にお声をかけていただいたことに対する深い感謝をお伝えし、私でよければということで恐縮ながらも、私に出来ることは是非ご協力させていただきたいということで、大変有り難く演奏のお話しをいただくこととなりました。

既に他の演奏者の方たちの演奏時間が決まっているとのことから私がいただいた演奏時間は２０分間でした。当初は小品を２曲ということでしたが、過去のリサイタルの録画 DVD をご覧下さったところ３曲弾いてほしいということになり、サラサーテ作曲ツィゴイネルワイゼン、マスネー作曲タイスの瞑想曲、そして私の編曲したグローリーメドレーという曲を演奏させていただくことになりました。

問題は、最後の曲のオーケストラ・ヴァージョンがなかったことです。それで、 生まれて初めてオーケストレーションというものに挑戦することとなりました。このグローリーメドレーという曲は私がロンドンで教会演奏家をしていた時に讃美歌２曲を元に作ったもので、大きなリサイタルの最後には必ず演奏するとても大切な作品です。

ですから、人に編曲を依頼するのではなく、何としても自分の手でオーケストレーションをしたいと思い、実行致しました。本番前日のリハーサルでグローリーメドレー・オーケストラヴァージョンをお聴きになった岸上様は何かに打ちのめされたように客席の椅子に深く沈み込んでぐったりと背もたれにもたれかかったまま「いやー伊藤さん、これ明日お客さん、感動するわ」としみじみ仰った様子が強く印象に残っております。

そして全てのリハーサルが終わった時、「伊藤さん、２年後にキタラでコンチェルトを弾いて下さい！」というお言葉をいただき、改めて心より感謝申し上げました。

その翌日の２０１５年９月１３日に北海道、新十津川にて開催された「万人の響」演奏会が大成功に終わり、実行委員長として非常にお元気な様子で大喜びではりきっていらしたにもかかわらず、岸上様はそのほんの数ヶ月後にご病気が急に悪化して、２年後の演奏会を待たずに亡くなられてしまいました。

確かその１年後くらいだったと思います。私は再び一本の電話を受け取りました。それは同演奏会の副委員長をしておられた方からで、岸上様と共になくなったと思っていた「次回の演奏会」のお話でした。以前に岸上様からの強力な推薦があった事により、札幌での演奏会でも伊藤光湖に演奏を依頼することになったとのことで、再び出演のお話しをいただき心より感謝申し上げました。

同時に、当初その演奏会は「亡くなった岸上春生様への追悼コンサートである」と伺った私は、岸上様への感謝の気持ちを込めて『「万人の響」創設者・岸上春生様への追悼曲　（ ヴァイオリンとオーケストラのための小品 ）』を作曲し、演奏させていただくことに致しました。

岸上様と初めてお会いした時に伺ったお話が大変強く印象に残っていたのです。それは、その１年前は病気で動けなかったのが、伊藤光湖と電話で話してから急にお元気になり、今では自転車を乗り回して滝川の町中を広告を集めて走り回っている、というお話でした。

また、フランスからお送りした私のリサイタルの録画 DVD をご覧下さり、「音楽が迫ってくる！」と生き生きと興奮した様子で大変お喜びでした。

そのような訳で、それほどまでに伊藤光湖の音楽を高く評価して下さった岸上様に対する感謝と追悼を、どうしても音で表したかったのです。それが私に出来る最大の恩返しだと思ったからです。その曲は、私にとって貴重な演奏の機会をお与え下さった恩人が亡くなってしまった「悲しみの旋律（テーマ）」に始まり、中間部は岸上様のお元気だった頃の温かく情熱的なお人柄、そしてクラシック音楽の啓蒙という夢の実現に向かって生き生きと突き進む中、それを阻むように襲いかかる病の黒い雲、それに続く最初に現れた「悲しみの旋律（テーマ）」に続き、最後はお顔が目に浮かぶ優しく安らかに天に昇って行くような旋律で終わる、そのようなストーリーを込めた曲を、その演奏会で演奏するために作曲致しました。

この曲は私にとって初めての「ヴァイオリンとオーケストラのための作曲」ということで、完全独学ではありましたがまずは各楽器の特徴をなるべく理解することから始めました。その２年前にグローリーメドレーをオーケストラ版に編曲したのが初めてのオーケストレーションでしたが、今回は作曲したものを後からオーケストレーションするのではなく、書き始めから 「この音はどの楽器で」というイメージを持ちつつ作曲を進めていきました。と言ってもまだまだ全くの知識不足でしたので、まずは交響曲などを聴いたりスコアを読んだりしてアイディアを膨らませるのにかなりの時間を費やしました。

書いたものを音として実際に聴くことが出来るのは演奏会本番前日のリハーサルが最初！というかなりチャレンジングな状況でしたが、ほぼイメージの通りの曲を書くことが出来たことを感謝致しております。

２０１７年５月７日、「万人の響・オーケストラと愛のコンサート」当日。その２年前に岸上様が情熱に燃えながら夢見て下さったノースフェスタ管弦楽団と伊藤光湖の札幌市 Kitara 大ホールでの共演後にステージから上を見上げた時、岸上様のあの「えへへ」という笑い声とともに、大喜びしておられるお茶目な笑顔が見えたような気が致します。改めて、「ノースフェスタ管弦楽団」と「万人の響（演奏会）」の創設者・岸上春生様への感謝と追悼の意を込めて、あの時の演奏を彼に捧げたいと思います。

伊藤光湖　（２０２１年１２月６日）

HOME / 次の記事